タロウ

茄子野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タロウ

【Ｎコード】
Ｎ７６４６Ｏ

【作者名】
茄子野郎

【あらすじ】
昔飼っていたタロウ。亡くなった母親がある日を境に突然タロウを毛嫌いし始めた。
その本当の理由とは…

私はその日、亡くなった母の遺品を整理していた。
お茶が好きだった母が毎日使っていた湯飲み、うちは貧乏だったから何度も着まわして
穴が開いたお気に入りのセーター、伊豆に家族で旅行した時に息子の私たちと一緒に撮った
写真など色々な品があった。写真には控えめにピースサインを作り、
かすかに笑顔を作る母が写っていた。母は笑顔を作るのがとても下手くそだった。
とても不器用だった。そんな性格が写真によく現れていた。
けれど私は不器用な一面を持つそんな母が大好きだった。

母の部屋の隅にある引き出しを整理していると1匹の犬の写真と日記帳が出てきた。
懐かしい。タロウだ。昔飼っていた柴犬、タロウ。
私は苦々しい思いでタロウの記憶を呼び戻していた。

母はタロウを溺愛していた。また、タロウも母によくなついていた。
母が少しの間家を出ただけでまるで「どうしてボクを置いていくのさ…」とこの世の終わり
のような表情をし、ものの5分くらいで帰ってくるなりクリスマスと正月が一緒に来たような
喜び方をみせたのだった。客観的にみてもペットが飼い主になつ

くという意味では最高峰の
レベルだったのではなかろうか思う。

しかし、そこまで溺愛していた母がある日を境にタロウに全くかまわなくなった。
あまりにも態度が激変したものだから私はその日付を覚えているほどだった。
7月26日だった。その日以来タロウが尻尾を振って母に近づこうが、
喜びを表現するために母の顔をなめようとしようが
母は全くタロウに興味のない素振りをみせるようになってしまった。
ただ、叩いたり、えさをやらなくなったりという虐待は全くなかった。
それだけに幼い私はわけが分からなかった。
「お母さんはタロウを嫌いになったの！？どうしてタロウを可愛がろうとしないの？」
母はゆっくりと真一文字に結んでいた重い口を開いた。
「お医者さんがね、タロウはこのままうちにいたら病気になっちゃうんだって。
だから他のおうちの子にした方がいいだろうって。だから遠い四国にいる親戚のおばちゃん
にあげることにしたの。」
私は最後まで抵抗し続けた。そのお医者さんのところに連れて行ってと泣きわめいた。
しかし一週間後、タロウはあっさりと連絡など取った事がない、たった1度しか会ったことのない
親戚のものになった。今までの家族との日々がまるで嘘だったかのように。
さすがに手渡す時は母は涙をこらえていた。

仕方なかったのだと自分に言い聞かせているようだった。
その時のタロウの表情は今でも鮮明に覚えている。

「なんか嫌な事思い出しちゃったな…」

私はタロウの写真を横目に母の日記帳を開いてみた。
日記は毎日ではないもののその日感じたことなどが大雑把に走り書きしてあり、
やはりその端々に母の不器用さが垣間見えるものだった。
分厚い日記だったが、めくっているうちに私は少しだけ紙質が違っているページに気付いた。
それは水に濡れた時にそうなる、ほんの少しだけ紙の表面が波打っていたものだった。
日付は7月26日。
あの日だった。

そのページを読んだ時、私は何とも言えない気持ちになった。
そんな事は子供ながらに薄々分かっていたがタロウは病気になんてなっていなかったし
また、母はタロウのことを嫌いになったわけではなかった。
タロウが可哀想にも思ったし、また母に対してあまりにも身勝手じゃないかという思いもあった。
ただなぜかどうしても母を責める気持ちにはなれなかった。
私が好きだったあまりにも不器用な母の姿と
タロウに対する愛情の深さがそのページに記されてあったからだ。
母はタロウを死なせたくなかったのだ。

タロウと別れた日から結構な時間が経った。
タロウがあの後どうなったのか、私たち家族は知らない。

母が亡くなるずっと前に本当はもう亡くなっていたのかもしれない。
でもただ一つだけ言える事は、
タロウは母の中で永遠に生き続けることができたということだ。
遺品の整理をひと通り終え、私は手入れする人がいなくなり
ちょっと不恰好で寂しそうに枝が伸び始めた庭に出て一つ、深呼吸をした。
微笑む母と無邪気にはしゃぐタロウがまだずっとそこにいるような、
そんな気がした。

7月26日　天気　雨

お隣の犬が亡くなった。とっても安らかな顔をしていた。
タロウをじっと見てみた。
タロウははぁはぁヨダレをたらしながら私を見ています。
本当に可愛いです。私はタロウをなでてやった。
ごめんね。タロウ。
私は今日あなたを親戚にあげることにしました。
もしあなたが死んでしまって、あなたの眠る顔をみたら
きっと私はその悲しみに耐えることができないだろうから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7646o/

タロウ

2011年10月8日03時40分発行